群の中の顔課題における対象者特性の影響 2

— 自閉傾向と表情認知の関連 —

○山田幸恵¹・高橋伸彰²・岡田斉³・野村忍⁴(¹岩手県立大学社会福祉学部・²関西学院大学文学研究科・³文教大学人間科学部・⁴早稲田大学人間科学学術院)

キーワード: 表情認知・自閉症スペクトラム・群の中の顔課題

Influence of Subject Characteristics in the face-in-the-crowd task 2

Sachie YAMADA¹, Nobuaki TAKAHASHI², Hitoshi OKADA³, and Shinobu NOMURA⁴(¹ Faculty of Social Welfare, Iwate Prefectural Univ., ² Graduate school of Humanities, Kwansei Gakuin Univ.,³ Faculty of Human Sciences, Bunkyo Univ., ⁴ Faculty of Human Sciences, Waseda Univ.)

Key words: facial recognitions, autism-spectrum, face-in-the-crowd task

目 的

自閉性障害の特徴の一つとして対人的相互性の欠如, つまりコミュニケーションの問題があげられる。コミュニケーションを円滑にする上で, 自身の感情を表情として表出したり, 他者の表情を認知したりする能力は必要不可欠なものである。自閉症スペクトラム仮説 (Baron-Cohen et al., 2001) では一般健常人にも自閉傾向があり, その連続体として自閉症を位置づけている。顔による感情表出や他者の表情認知について, これまで自閉症児を対象とした研究がいくつかあるが, 一般健常人におけるパーソナリティ特性としての自閉傾向を踏まえた研究は, 表情認知についてはこれまでほとんどされていない。本研究では, Gilboa-Schechman, Foa & Amir (1999) による『群の中の顔課題(face-in-the-crowd task)』を用いて, 一般大学生における表情認知と自閉傾向との関連を検討した。

方 法

対象者: 大学学部学生と大学院生 46 名を対象とした。
調査材料: Autism-Spectrum Quotient(AQ; Bailey, Couteur, Gottesman, Bolton, Simonoff, Yuzda, & Rutter, 1995; 若林, 2003): 一般健常人の自閉症傾向を測定できる尺度である。「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」の 5 因子 50 項目からなる。
〈実験材料〉
刺激: 使用された刺激は「幸福」「悲しみ」「驚き」「怒り」「嫌悪」の 5 表情の顔写真と中性的な表情の顔写真であった。
課題: コンピュータ画面上に 12 枚の顔写真が提示され, その中に 1 枚の異なるターゲット(情動表情)が存在するか否かを判断する。
提示条件: 提示刺激の条件は, 以下の通りであった。
条件 1: すべて情動表情である
条件 2: すべて中性表情である
条件 3: 中性表情の中に情動表情が存在する
条件 4: 情動表情の中に中性表情が存在する

結 果

質問紙の回答に不備のあった 1 名と課題正答数が 80% 以下の 6 名を除外し, 37 名 (男性 11 名, 女性 26 名) を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は 21.08 ± 1.57 歳であった。
課題への平均反応時間と, 各実験条件および各表情の平均反応時間を求め, AQ の各下位尺度得点と合計得点とのピアソンの積率相関係数を算出した。その結果, 平均反応時間と AQ, 実験条件ごとの平均反応時間と AQ に相関は認められなかった。表情ごとの平均反応時間について検討すると, 怒り表情の平均反応時間と AQ の「社会的スキル」に中程度の負の相関が認められた ($r = -.37, p < .05$)。

課題への平均正答数と, 各実験条件および各表情の平均正

答数を求め, それぞれ AQ の各下位尺度得点と合計得点とのピアソンの積率相関係数を算出した。平均正答数と AQ の「細部への注意」に中程度の正の相関がみられた ($r = .37, p < .05$)。また, 平均正答数と「想像力」 ($r = -.42, p < .01$), 「コミュニケーション」 ($r = -.41, p < .05$) に中程度の負の相関がみられた。条件ごとに検討すると, 条件 1 の平均正答数と「想像力」 ($r = -.51, p < .01$), 「コミュニケーション」 ($r = -.46, p < .01$) に中程度の負の相関が認められた。条件 3 の平均正答数と「社会的スキル」 ($r = -.39, p < .05$) に中程度の負の相関が認められた。条件 4 の平均正答数と「想像力」 ($r = -.36, p < .05$), 「コミュニケーション」 ($r = -.406, p < .05$) に中程度の負の相関が認められた。

考 察

実験の結果, 怒り表情への反応時間のみ自閉性スペクトラムの「社会的スキル」と負の相関が認められた。このことは, 自閉性スペクトラムの特徴の中でも社会的スキルの乏しさは, 対人場面で相手の怒り表情に気がつくのに時間がかかることにつながることを示している。

正答数の結果から, 自閉症スペクトラムの「細部への注意」は平均正答数と正の相関がみられた一方, 「想像力」「コミュニケーション」は負の相関関係が示された。このことから, 想像力やコミュニケーション能力の乏しさは, 対人場面で異なる表情を誤って判断することにつながることを示唆された。

条件 1 と条件 4 で平均正答数と「想像力」「コミュニケーション」に相関関係が認められたが, 条件 2 と条件 3 では関連がみられなかった。条件 1 と 4 は情動表情の顔写真がほとんどであり, 刺激の強度が強くなっている。想像力やコミュニケーション能力が乏しい傾向にある人は対人場面で相手の情動表情を見ることによって自身の感情が賦活され, 衝動的に判断をして誤反応をしてしまう可能性が示された。表情ごとの平均正答数に相関がなかったことも考えると, 想像力やコミュニケーション能力の乏しい人は, 何らかの情動が喚起されている表情を相手が呈していることには気づくが, その表情の弁別が困難であるのではなかろうか。実験条件 3 で社会的スキルとの負の相関が認められたことから, 感情価のある表情を見つけ出すためには社会的スキルが必要であることを示していると考えられる。

本研究の結果, 自閉傾向と表情認知の関連が示された。コミュニケーションを円滑に行うためにもすばやく正確な表情認知は重要であり, 今後さらなる検討が必要である。

引用文献

Gilboa-Schechtman, E., Foa, E.B., & Amir, N. (1999). Attentional biases for facial expressions in social phobia: The face-in-the-crowd paradigm. *Cognition and Emotion*, 13, 305-318.